

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

小林芳規著『小林芳規著作集 第一巻 鎌倉時代語研究（上）』、『小林芳規著作集 第二巻 鎌倉時代語研究（下）』

本書は『小林芳規著作集』全八冊のうち、第一巻・第二巻にあたる。第一巻では鎌倉時代語研究の課題・方法・研究資料について記述された論考を、第二巻では鎌倉時代語を中心とした中世語に係る論考を収める。

第一巻の構成は以下のとおりである。「鎌倉時代語研究の課題」「鎌倉時代語研究の方法」「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」「和化漢文における口頭語資料の認定」「日本語の歴史——中世——」「中世片仮名文の国語史的研究」、以上からなる。

また、第二巻に収載される論文は以下のとおりである。「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」「鎌倉時代の高山寺における外典の受容について」「高山寺蔵定真本とその国語資料としての価値」「明恵上人語録高山寺蔵「却廢忘記」鎌倉時代写本の用語——日本語の歴史・中世（昭和四十四年十二月号）の補訂・正誤に寄せて——」「国語史料としての高山寺本古往来」「石清水文書田中宗清願文案に現れた藤原定家の用字用語について」「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」「金沢文庫蔵本解脱門義聴集記の中世語について」「名語記の口頭語について」「東国所在の院政鎌倉時代二文献の用語」「国語史研究資料としての中山法華経寺本三教指帰注」「千葉県市川市在中山法華経寺文書に現れた中世語について」「訓点資料に現れた中世語について」「猿投神社蔵古文孝経建久六年点における地方語的性格」、以上である。（遠藤佳那子）

(2021年8月5日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 395頁 定価13,200円 ISBN 978-4-7629-3660-9)

(2022年1月20日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 548頁 定価17,600円 ISBN 978-4-7629-3661-6)

井出祥子・藤井洋子監修、岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子編『場と言語・コミュニケーション』

本書は、『文化と言語使用』をテーマにしたシリーズの第3巻として刊行された。同シリーズ第1巻『コミュニケーションのダイナミズム——自然発話データから——』及び第2巻『場とことばの諸相』につづき、この書では言語学に「場」という概念を導入した「場の言語学」の立場から、「場と相互作用」というパラダイムを論じる。人称詞、指示詞、絵本の日英対照、複合動詞、身体論などの多様な事例を対象にした論考が並ぶ。

本書の構成は次のとおりである。「シリーズ『文化と言語使用』刊行にあたって（井出祥子・藤井洋子）」、「Preface (William F. Hanks)」, 「序文 (ウィリアム F. ハンクス, 植野貴志子訳)」, 「まえがき (編者一同)」に続き, 「場の理論概説——場の言語・コミュニケーション

とは何か——（大塚正之）」、「場の言語学・語用論とその展開——言語と文化の関わりメカニズムを求めて——（井出祥子）」、「認知言語学から場の言語学へ——新しい言語学のパラダイムの展開——（岡智之）」、「日本語と英語における自己の言語化——「場所」に基づく一考察——（植野貴志子）」、「直示表現に見る「日本語の場」と「英語の場」の違い（新村朋美）」、「英語と日本語の絵本の違いとその由来——場の理論からの考察——（成岡恵子）」、「対称詞のシフトは何故起こるのか——場の理論からの解釈——（小森由里）」、「〈場〉の見え姿の変化と日本語の文法形式——複合動詞「～込む」の分析を通じて——（小柳昇）」、「場」における身体性とコミュニケーション（河野秀樹）。巻末には「索引」と「執筆者紹介」が付く。（椎名渉子）

（2022年1月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 240頁 定価3,960円 ISBN 978-4-89476-793-5）

菊地恵太著『日本略字体史論考』

本書は日本における略字体を対象とし、文献調査に基づいてその使用実態の歴史的変遷を明らかにしようとするものである。2019年に東北大学に提出された博士論文を基とし補筆・修正を加えたものであり、日本語学会論文賞叢書の第2冊目として刊行された。

全5部からなり、各部の構成は以下のとおりである。「第1部 序論」は「第1章 漢字字体史の目的と方法」「第2章 漢字字体を巡る概念と術語」「第3章 漢字字体史の資料」、以上3章により漢字字体史を論じる前提を説く。「第2部 字誌各論」には、「第4章「学・拳・蜚」の冠」「第5章「尽」の冠」「第6章「釈」の旁「尺」」「第7章 量用符号を利用した略字体」「第8章「万（萬）」の字体意識」、以上5本の論考を収める。「第3部 位相論」は、「第9章「尺・釈」の位相」「第10章「仏」の位相」「第11章 いわゆる「抄物書」の位相」、以上3本の論考からなる。「第4部 総論」は、「第12章 略字体史粗描」を配し、第2部・第3部を踏まえて「略字体史」を整理し、論じる。「第5部 結語」は「第13章 漢字字体史における略字体史の位置」を収め、全体の総括とする。（遠藤佳那子）

（2022年1月31日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 288頁 定価11,000円 ISBN 978-4-8386-0766-2）

中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学研究論集』

本書は、1992年に創設された中部日本・日本語学研究会の30年の活動を記念して編まれた論集である。急逝された会の創設者・藤田保幸氏の研究姿勢に共鳴する研究者による26編の論考からなる。全体はおおよそその研究領域カテゴリーによって分類されており、第Ⅰ部は現代・共時、第Ⅱ部は史的文法・通時、第Ⅲ部は社会言語学・方言、第Ⅳ部は日本語史、第Ⅴ部は資料・文体・文法の内容からなる。巻末には第1回から87回に及ぶ中部日本・日本語学研究会の記録が付される。

収録された論考は以下のとおりである。

第Ⅰ部「引用されたコトバの表意性の換喩的拡張（藤田保幸）」「モノダとコトダによ

る名詞述語文——発話、思考・感情を表す名詞の場合——（丹羽哲也）」「間接疑問節と結びつく述語について（江口正）」以上3編。

第Ⅱ部「近代におけるサセテモラウの発達——サ入れ言葉の出現と意志用法の伸長——（山口響史）」「江戸語・東京語における逆接の接続詞——形式の推移と用法——（宮内佐夜香）」「近世前期条件表現史における順接と逆接の非対称性について（矢島正浩）」「意志・推量形式の従属節への取り込み（北崎勇帆）」「主格助詞「が」の拡大と準体法の衰退（金銀珠）」「日本語文語文法現象十進分類番号表の試み（小田勝）」以上6編。

第Ⅲ部「宜蘭クレオールの「自然環境語彙」について（真田信治）」「男鹿半島の風の語彙（久木田恵）」「四国地方におけるラ抜き言葉の方言分布と解釈（三宅俊浩）」「鹿児島方言史における準体助詞の発達（久保蘭愛）」以上4編。

第Ⅳ部「二葉亭四迷訳『あひゝき』における「難しい漢語」（揚妻祐樹）」「啓蒙書の外国語のカタカナ表記の扱い——『西国立志編』の割注を資料として——（木村一）」「『日葡辞書』におけるオノマトベの捉え方——ABAB型の掲出傾向から——（深津周太）」「『バレット写本』におけるアセント符号について——長音に対応するアセント符号の諸相——（千葉軒士）」「『今昔物語集』における語彙の文体差——人間・家族を表す名詞語彙を事例に——（田中牧郎）」「語の頻度列からみた古典作品の計量的分析——日本語歴史コーパスを利用して——（山崎誠）」「『土佐日記』の「よるあるき」——複合語の認定と書写態度——（橋本行洋）」以上7編。

第Ⅴ部「中古語における引用句「…と」の特殊用法（辻本桜介）」「仁都波迦点の創始と展開——憐昭から皇慶門流へ——（宇都宮啓吾）」「平安鎌倉時代における「こひねがふ」の意味用法と位相——訓点語及び記録語と歌評用語——（山本真吾）」「同一場面記事の比較を通してみた古記録の文体——気象災害記事の比較から——（後藤英次）」「近世前期開版倭玉篇の諸本に就いて——四百七十七部首系諸本——（鈴木功真）」「『一読三嘆 当世書生気質』の本文校訂と言語変化の問題——漢字表記語を中心に——（木村義之）」以上6編。（遠藤佳那子）

（2022年1月31日発行 和泉書院刊 A5判横組み 520頁 定価11,000円 ISBN 978-4-7576-1024-8）

荒尾禎秀編『日本語学から見た和刻本『福恵全書』——索引と素描——』

『福恵全書』とは中国清代の地方首長の経験を記したもので、下級官吏の執務上の心得を指南する書ともなっている。白話小説をはじめとする江戸時代の文芸書において漢語の左側にも振仮名が付されることがあるが、文芸書ではない『福恵全書』にも数多の左振仮名がある。これに着目し、幕末明治期初期における漢語の隆盛の基盤という問題意識を背景として、網羅的な語彙索引の作成、諸本研究、そして日本語研究の課題に取り組んだのが本書である。

本書は「索引・校異編」と「研究編」からなる。「索引・校異編」には「第1 漢字語索引」「第2 仮名索引」「第3 校異表」を収める。「研究編」は、「第1章 和刻本『福恵全書』の軌跡」「第2章 和刻本『福恵全書』の書誌・諸本」「第3章 和刻本『福恵全書』

と日本語学」以上3章から構成され、日本語学の資料としての価値を示す。(遠藤佳那子)
(2022年2月8日発行 汲古書院刊 A5判横組み 1111頁 定価26,400円 ISBN 978-4762936715)

鈴木彩香著『属性叙述と総称性』

本書は、日本語の属性叙述文の研究と、英語などの言語を対象とする総称文研究との知見を相互に参照し、特にこれまで十分になされてこなかったテンスの総称性を中核として体系化することを目指す。またそれによって、属性叙述文を構成的に分析する枠組みを示すことを試みている。

本書の構成は以下のとおりである。「第1章 序論」「第2章 事象と属性の対立に関わる諸要因」「第3章 主語と総称性」「第4章 目的語と総称性」「第5章 非状態動詞におけるアスペクトと総称性」「第6章 状態動詞におけるアスペクトと総称性」「第7章 結論」、以上7章からなる。なお本書は、2017年に筑波大学に提出された博士学位論文「属性叙述文の統語的・意味的分析」の内容に大幅な加筆・修正を行ったものである。(遠藤佳那子)

(2022年2月28日発行 花鳥社刊 A5判横組み 231頁 定価3,850円 ISBN 978-4909832542)

木部暢子・竹内史郎・下地理則編『日本語の格表現』

本書は日本語の格表現について、古代語・方言・言語類型論の視点から、全13章にわたって論じるものである。国立国語研究所で開催された公開シンポジウム「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」および「格と取り立て」をもととして発展させた内容からなる。

「第1部 古代日本語の格」は、「第1章 古典語の格標示に関する諸問題(小田勝)」「第2章 古代日本語における「問ふ」を述語とする構文の格標示法の変化について(後藤睦)」「第3章 上代語の主文終止形節における格配列、相互識別、無助詞現象(竹内史郎)」以上3章からなる。「第2部 日本語方言の格」は、「第4章 本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について——京都市方言と宮城県登米町方言の分析——(竹内史郎・松丸真大)」「第5章 富山市方言における格成分のゼロ標示——二重対格相当構文が可能になることに着目して——(小西いずみ)」「第6章 九州方言の格表現——熊本市方言と博多方言の基本配列を中心に——(坂井美日)」「第7章 宮崎県椎葉方言 格の諸相——与格を中心に——(金田章宏)」「第8章 宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示(下地理則・松岡葵・宮岡大)」「第9章 日本語諸方言の主語・目的語の格標示形式(木部暢子)」以上6章からなる。「第3部 日本語の格と言語類型論」は、「第10章 日琉諸語の格体系——概観と類型化——(下地理則)」「第11章 南・田窪の4段階説と格・焦点表現——談話情報との関連から——(金水敏)」「第12章 日本語方言の斜格(佐々木冠)」「第13章 言語類型論から見た日本語の格(風間伸次郎)」以上4章からなる。巻末に索引を付す。(遠藤佳那子)

米川明彦著『集団語の研究 上巻』、『集団語の研究 下巻』

本書は集団語の全体像を定義・種類・発生理由・研究的意義などから総合的・体系的に論じた大著である。上巻（2009 年刊）に続き、下巻が刊行された。上巻には「第一部 総論」と「第二部 各集団のことば」が編まれ、個々の集団語の研究資料が収載されている。下巻には、上巻をもとに「第三部 各論」として集団語全体を多様な切り口から論じた論考が収められる。2 巻合わせて紹介したい。

上巻「第一部 総論」には、「第一章 集団語とは何か」,「第二章 集団語研究の位置づけとテーマ」。「第二部 各集団のことば」には、「第三章 反社会的集団の語」,「第四章 職業的集団の語」,「第五章 被拘束集団の語」,「第六章 学生集団の語」,「第七章 趣味娯楽集団の語」。「第三部 各論」には、「第八章 文献から見た俗語」,「第九章 集団語の発生と伝播」,「第十章 集団語の属性」,「第十一章 集団語のカテゴリー」,「第十二章 集団語の造語法」,「第十三章 集団語に見る言い換え」,「第十四章 集団語の言語意識」,「第十五章 集団語の歴史と変遷」,「下巻のまとめ」,「補足 すっきゃねん若者ことばの会」。上下巻の巻末には「語彙索引」と「事項索引」が、下巻巻末には「上巻誤植訂正」,「あとがき」が付される。(椎名渉子)

(上巻 2009 年 7 月 30 日発行 東京堂出版刊 A5 判縦組み 692 頁 定価 12,000 円(税抜) ISBN 978-4-490-20665-4, 下巻 2022 年 3 月 20 日発行 東京堂出版刊 A5 判縦組み 766 頁 定価 13,200 円 ISBN 978-4-490-21060-6)

近藤泰弘・澤田淳編『敬語の文法と語用論』

本書は 2019 年に開催された国際シンポジウム「敬語とは何か——敬語表現の諸相——」をきっかけとして構想され、現代語から古典語、方言、多言語との対照など、多岐にわたる敬語研究の論考を収めた論文集である。本書は 3 部からなり、各部と収載される論考は以下のとおりである。

第Ⅰ部「敬語の文法——敬語の理論と分類——」は、「敬語から見た日本語の種類——ダイクシスからの考察——(近藤泰弘)」,「『敬語の指針』についての覚書と、もう一つの敬語分類案(菊地康人)」,「なぜいま敬語は「5 分類」になったのか?——日本人の敬語意識に起こっていること——(滝浦真人)」,「古典敬語の特質と関係規定語の問題(小田勝)」,以上 4 編からなる。第Ⅱ部「敬語の語用論——敬語運用の歴史と地域差——」は、「日本語敬語の運用に関する語用論的研究——相対敬語の類型化をもとに——(澤田淳)」,「10 世紀末『落窪物語』における下位への対面素材敬語——発話場面の文脈との関わりから——(森山由紀子)」,「近世後期洒落本の「受益型」行為指示表現——地域差と現代語との差異——(森勇太)」,「昔話談話にみる待遇表現の地域差(日高水穂)」,以上 4 編からなる。第Ⅲ部「敬語とポライトネス——対人配慮と言語対

照——」は、「ポライトネスとキャラクター（金水敏）」「ポライトネスと膠着語——日本語とトルコ語をめぐって——（テキメン・アイシェヌール）」「行為要求表現の形式と意味——日本語と中国語の場合——（井上優）」、以上3編からなる。（遠藤佳那子）

（2022年3月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 434頁 定価7,480円 ISBN 978-4-7589-2360-6）

松本曜・小原京子編『フレーム意味論の貢献——動詞とその周辺——』

フィルモアが提唱した「フレーム」という概念について、言語研究における重要性が再認識されている一方で、その役割を本格的に論じた書は日本にあまりなかった。本書はフレームという概念が動詞の意味論において果たす役割に関する論考を収載しており、「序章 フレーム、フレーム意味論、フレームネット（松本曜・小原京子）」に続き、「第Ⅰ部 動詞の意味論」「第Ⅱ部 構文とイディオム」「第Ⅲ部 動詞と名詞・オノマトペ」の3部から構成される。各部の内容は以下のとおりである。

第Ⅰ部は、「第1章 解釈述語と内容述語の主要部交替——Ruu_risk フレームにかかわる英語と日本語の文構造の考察——（小原京子・長谷川葉子）」「第2章 複数のフレームに基づく多義語の分析——「黙る」を中心に——（榎山洋介）」「第3章 動詞における反義性——フレーム意味論による分析——（松本曜）」以上3章からなる。第Ⅱ部は「第4章 Eat one's way——構文とフレーム意味論の接点——（岩田彩志）」「第5章 動詞の関連事象に基づく言語分析——「飲む」とdrinkから見る日本語と英語の結果構文——（陳奕廷）」「第6章 日本語の心理動詞と心理慣用句——フレーム意味論とフレームネットの観点から——（野中大輔）」「第7章 述語的な慣用的連結句から見た日本語身体部位詞とフレーム（有菌智美）」以上4章からなる。第Ⅲ部は、「第8章 日本語の転成名詞に見られる小さな規則性——「支え」「妨げ」「覆い」などに注目して——（氏家啓吾）」「第9章 英語における語形成へのフレーム意味論的アプローチ——植物名詞に由来する名詞転換動詞の研究——（中嶋浩貴）」「第10章 オノマトペの意味のファセット性（秋田喜美）」以上4章からなる。巻末に索引を付す。（遠藤佳那子）

（2022年3月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 236頁 定価3,850円 ISBN 978-4-7589-2368-2）

斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ——言語研究の拡がりを見据えて——』

本書は、2019年に開催された中国海洋大学で開催された国際シンポジウム「言語全体を基盤として語彙論と文法論との繋がりを考える——言語単位を軸として——」に端を発し、多様なアプローチの論文が収められた論文集である。ひつじ研究叢書〈言語編〉第186巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」に続き、「Ⅰ 語彙と文法 語構成から文章まで」には、「語構成との関連性からみた拘束字音形式の文中用法——「感」「式」「風」を対象として——（曾睿）」、「対義並列複合語をめぐって（修徳健）」、「「カテゴリカルな意味」をめぐって——奥田靖雄の連語論とカテゴリカルな意味——（早津恵美子）」、「「機能動詞的形容詞」

の類型化の試み——BCCWJにおける使用実態の分析から——（佐藤佑）」、「語結合の“慣用化”に関する事例的検討——現代新聞における時事的な動詞句の調査から——（石井正彦）」、「文章における「名詞の助数詞的用法」の指示機能——「条件」と「容疑者」を例に——（東条佳奈）」、「「真実性」に言及する談話標識（甲田直美）」、「日本語の『省略』を支える語彙——文法的システム——（庵功雄）」、「日本語文法論における言語単位論の系譜——「単位一系論」と「単位二系論」——（斎藤倫明）」。

また、「Ⅱ 語彙と文法 文法化と対照研究」には、「現代日本語「ならでは」の用法（宮地朝子）」、「文法化研究の諸相（ナロック・ハイコ）」、「日本語とスペイン語の副詞の形態的特徴に関する対照言語学的研究（林雅子）」、「微細程度把握—接尾辞「～め」をめぐる日中対照研究（森山卓郎・呂妍）」。

巻末に、「索引」と「執筆者一覧」を付す。（椎名渉子）

（2022年3月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 360頁 定価8,800円 ISBN 978-4-8234-1111-3）

友定賢治編『感動詞研究の展開』

本書は、編者による『感動詞の言語学』（2015年刊、ひつじ書房）に続く、感動詞研究の成果をまとめた論文集である。感動詞化のメカニズム、意味用法、談話、地域差、対照研究など多様な切り口から論じられる。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第182巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「Ⅰ 感動詞とは」には、「感動詞と現場依存性（定延利之）」、「感動詞化のメカニズムについての対照研究（仁科陽江）」。「Ⅱ 感動詞の意味・用法」には、「感動詞としての「マジ」と「ホント」（森山卓郎）」、「「と」系感動詞の意味・用法 「おっと」「えーと」を中心に（富樫純一）」。「Ⅲ 感動詞と文構成」には、「日本語呼びかけ詞の文構成上の特徴（金田純平）」。「Ⅳ 談話の中の感動詞」には、「中国語天津方言の感動詞「ei」の記述に基づく一考察（羅希）」、「日本語会話の二連鎖感動詞類に関する予備的考察（劉伝霞・有元光彦）」、「日本語学習者の応答表現の運用（野田尚史）」、「初対面会話における感動詞「へー」「えー」の分析——中国語との対照から——（楊虹）」、「日本語と中国語の情報受容の表現（井上優）」。「Ⅴ 感動詞の地理的変異」には、「感動詞（応答詞）方言の研究 「へえ」を中心に（友定賢治）」、「感動詞の性格の地域差——何のためにどう驚くか——（小林隆）」。「Ⅵ 感動詞研究の広がり」には、「役割語における感動詞（金水敏）」、「あいさつ表現の言語類型論に向けて 日台あいさつ表現の比較を通して（中西太郎・林青樺）」。

巻末には「索引」、「執筆者一覧」を付す。（椎名渉子）

（2022年3月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 352頁 定価7,480円 ISBN 978-4-8234-1065-9）

永谷直子著『現代日本語における形容詞の連用用法——外面性／内面性に着目して——』

本書は、形容詞連用形のふるまい方の違いを形容詞の意味的・統語的タイプの違いか

ら包括的に論じた書である。本書は3部構成となり、第1部では形容詞の分類に関する先行研究がまとめられ、第2部では、どのような場合に、どのような形容詞が、連用形でふるまえるのかという問いについて、具体的事例をもとに、現代日本語における形容詞の連用用法を記述する。そして第3部では、それ以外の要因の可能性を探る。これらを通して、形容詞の連用用法の実態を明らかにする。

各章は次のようになる。「まえがき（庵功雄）」、「序章 本書の目的と構成」に続き、「第1部 先行研究における形容詞と連用用法」には、「第1章 日本語の形容詞と用法」、「第2章 形容詞の分類をめぐる」、「第3章 形容詞の格をめぐる」、「第4章 形容詞の連用用法をめぐる」。「第2部 連用用法における形容詞のタイプ」には、「第5章 考察の枠組み」、「第6章 外面的用法と形容詞のタイプ」、「第7章 内面的用法における形容詞のタイプ（1）：形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞ではない場合」、「第8章 内面的用法における形容詞のタイプ（2）：形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞である場合」、「第9章 内面的用法における形容詞のタイプ（3）：動きの様子を表す場合」、「第10章 その他の問題：「うれしい」と「楽しい」を例に」、「第11章 連用用法における形容詞のタイプのまとめ」。「第3部 残された課題」には、「第12章 残された課題（1）属性叙述における構文の選択：「Aさんはピアノを上手に弾きます」をめぐる」、「第13章 残された課題（2）言語間における構文の選択の差異：「（髪を）よく切ったね」をめぐる」、「終章 まとめと今後の課題」。巻末に「付録」、「参考文献」、「索引」、「あとがき」が付く。（椎名渉子）

（2022年3月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 310頁 定価4,950円 ISBN 978-4-87424-895-9）

日本漢字学会編『漢字系文字の世界——字体と造字法——』

本書の表題にある「漢字系文字」とは、漢字や、漢字に影響を受けた文字体系、そして漢字とは異なる文字体系に入った個別の漢字も含めた総称として用いている。本書は2019年に開催された日本漢字学会のシンポジウム「字体と造字法の創造力——漢字文化圏の周辺部より問う——」を発展させ、漢字系文字の造字法、すなわち文字の構成原理について論じるものである。

本書の構成は以下のとおりである。「序章 文字史のなかの漢字系文字とその研究意義（矢田勉）」「第1章 漢語派諸言語の字体新造（吉川雅之）」「第2章 古壮字の字体と造字法（蘇柳朱）」「第3章 チュノムの造字法（清水政明）」「第4章 西夏文字の「部首」と造字法（荒川慎太郎）」「第5章 日本製漢字の造字法 付・朝鮮（韓国）製漢字の造字法（笹原宏之）」「終章 漢字系文字の造字法の比較（山下真里）」、巻末に「英文要旨」と「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2022年3月31日発行 花鳥社刊 A5判横組み 172頁 定価3,080円 ISBN 978-4-909832-48-1）

沖裕子・姜錫祐・趙華敏著『日韓中対照 依頼談話の発想と表現』

本書は、日本語・韓国語・中国語を母語とする日本語研究者の国際共同研究体制のもと、談話論の理論と談話事象の対照記述の両面を網羅した研究書である。依頼談話に各言語の特徴がどのように見出せるのかについて理論的・実証的に論じている。和泉書院研究叢書第544巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」に続き、「序章 研究史における位置づけ」、「第1章 研究の目的と方法」、「第2章 社会文化の影響をうけた依頼談話表現〈日韓中対照〉」、「第3章 談話内容の影響をうけた依頼談話表現〈日中対照〉」、「第4章 意識態度の影響をうけた談話表現法(1)〈日韓対照〉」、「第5章 意識態度の影響をうけた談話表現法(2)〈日韓中対照〉」、「第6章 大学生の依頼談話意識〈日韓対照〉」、「第7章 大学生の依頼談話意識〈日中対照〉」、「第6、7章 補遺」、「第8章 韓日異文化コミュニケーションの留意点」、「第9章 主観性の相違からみた中日の言語使用」、「第9章 主観性の相違からみた中日の言語使用」、「第11章 日本語談話の曖昧性——依頼と連続する命令談話の表現法——」、「第12章 対照談話論のための作例談話」。全12章から成る。巻末には「初出一覧」、「参考文献」「索引」、「Abstract and Table of Contents」を付す。(椎名渉子)

(2022年4月15日発行 和泉書院刊 A5判横組み 356頁 定価8,250円 ISBN 978-4-7576-1029-3)

松倉昂平著『福井県嶺北方言のアクセント研究』

本書は、福井県嶺北地方の西部とその周辺に位置する7市4町でのアクセント調査結果から、類型論的な多様性に富む当該地方のアクセント体系の分析と系統論的考察を試みた書である。本書の内容は、著者が2018年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文に基づく。また、本書の刊行にあたって日本語学会・武蔵野書院より刊行助成を受け、日本学術振興会特別研究員奨励費「言語地理学と比較再建に基づく福井・石川両県のアクセントの記述的・通時の研究」(課題番号16J03745)、「北陸諸方言の音韻・文法体系の記述的研究」(課題番号19J00755)、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果の一部をまとめたものである。

本書の構成は次のとおり。「第1章 序論」に続き、「第2章 記述対象方言の概説」、「第3章 アクセント分布の概観」、「第4章 あわら市・坂井市・福井市の三型アクセント」、「第5章 あわら市・坂井市・福井市の二型アクセント」、「第6章 石川県加賀市・小松市の多型アクセント」、「第7章 福井平野東部・南部周辺の多型アクセント」、「第8章 1～4拍名詞の比較に基づく系統再建」、「第9章 2～3拍動詞の比較に基づく系統再建」、「第10章 現存諸方言の通時的成立過程」。巻末に「アクセント資料」、「参考文献」、「あとがき」、「索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年5月9日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 312頁 定価12,100円 ISBN 978-4-8386-0767-9)

藤田保幸著『森鷗外初期翻訳作品の国語学的研究』

森鷗外の初期翻訳作品を対象とする本書は、訳し方ではなく、訳出された訳文を対象として国語学的分析を加え、鷗外の翻訳言語や初期の文業の特質を探るものである。中でも最初の創作・翻訳作品集『水沫集』所収作品を中心に考察する。本書は全3章からなり、各章の構成は以下のとおりである。

「序言」に続く「第1章 言文一致文」は、「1. 森鷗外初期言文一致体翻訳小説の本文改訂から見えてくるもの」「2. 鷗外翻訳の国語学的分析——初期の言文一致体の試みをめぐって——」「3. 森鷗外訳「玉を懷いて罪あり」覚書——その訳出の方向性について——」「4. 森鷗外訳「新浦島」の文章について——デス・マス体をめぐって——」「5. 森鷗外が明治二二年に著したデス・マス体による衛生学関係の著述の文章について」、以上5本の論考からなる。「第2章 戯曲」には、「1. 森鷗外訳「折薔薇」とその本文改訂をめぐって——『水沫集』所収初期翻訳戯曲の言語についての一考察——」「2. 森鷗外初期翻訳戯曲の言語について——「調高矣洋絃一曲」を中心に——」「3. 森鷗外訳「調高矣洋絃一曲」の音訛の実態」「4. 森鷗外訳「調高矣洋絃一曲」の科白の性格——待遇表現と自称・対称代名詞の使用の面から——」「5. 森鷗外訳「伝奇トニー」の科白の言語について」、以上5本の論考を収める。「第3章 文語文」には、「1. 森鷗外訳「黄綬章」の文章について——「瑞西館」「うきよの波」との比較を通して——」「2. 森鷗外訳「埋木」の文章について」「3. 森鷗外訳「ふた夜」の疑問表現について」「4. 鷗外初期文語体作品の疑問表現——『水沫集』所収作品を資料として——」「5. 森鷗外「そめちがへ」の文章について——同時代文語作品二、三との比較から——」「6. 森鷗外訳「地震」「悪因縁」の文章をめぐって」、以上6本の論考を収める。巻末に著者の著述目録を付す。(遠藤佳那子)

(2022年5月30日発行 和泉書院刊 A5縦組 381頁 定価8,800円 ISBN 978-4757610309)

高田博行・田中牧郎・堀田隆一 編著『言語の標準化を考える——日中英独仏「対照言語史」の試み——』

本書は、対照言語史という新しい観点から、標準語形成の歴史を異なる言語間で対照することにより、従来とは違った切り口で各言語の歴史をとらえ直すことをめざすものである。各論考について、紙上で編者の知見が付記されるという構成も新しい。

本書は次のような章立てとなっている。「まえがき」に続き、「第1部 「対照言語史」：導入と総論」には、「第1章 導入：標準語の形成史を対照するということ（高田博行・田中牧郎・堀田隆一）」、「第2章 日中英独仏一各言語史の概略；日本語史の概略／中国語史の概略／英語史の概略／ドイツ語史の概略／フランス語史の概略（田中牧郎・彭国躍・堀田隆一・高田博行・西山教行）」。「第2部 言語史における標準化の事例とその対照」には、「第3章 ボトムアップの標準化（渋谷勝己）」、「第4章 スタンダードと東京山

の手（野村剛史）」、「第5章 書きことばの変遷と言文一致（田中牧郎）」、「第6章 英語史における「標準化サイクル」（堀田隆一）」、「第7章 英語標準化の諸相——20世紀以降を中心に——（寺澤盾）」、「第8章 フランス語の標準語とその変容——世界に広がるフランス語——（西山教行）」、「第9章 近世におけるドイツ語文章語——言語の統一性と柔軟さ——（高田博行・佐藤恵）」、「第10章 中国語標準化の実態と政策の史話——システム最適化の時代要請——（彭国躍）」、「第11章 漢文とヨーロッパ語のはざままで（田中克彦）」。

巻末に、「あとがき」と「索引」を付す。（椎名渉子）

（2022年6月1日発行 大修館書店刊 A5判横組み 288頁 定価2,970円 ISBN 978-4-469-21391-1）

丸山直子著『話し言葉と書き言葉の格助詞——コーパスと辞書記述の観点から——』

本書は、辞書記述とコーパスの両面から日本語格助詞の実態をとらえる書である。多様な切り口から積まれてきた格助詞研究の課題・問題点を形態論・統語論・意味論・運用論の面から整理し、その話題について各章に取り上げる。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第190巻として刊行された。

構成は次のとおりである。「第1章 序論」に続き、「第2章 先行研究の概要と残された問題点」,「第3章 形態論的アプローチ——格助詞の形——」,「第4章 統語論的アプローチ——自他、格パターン、格の階層——」,「第5章 意味論的アプローチ——深層格・意味役割・辞書の意味記述——」,「第6章 運用論的アプローチ——文体との関係 書き言葉・話し言葉、実際の現れ方——」,「第7章 格を超えて——無助詞とうなぎ文・こんにやく文——」,「第8章 結論」。

巻末に「あとがき」,「参考文献」,「索引」を付す。（椎名渉子）

（2022年6月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 384頁 定価7,480円 ISBN 978-4-8234-1142-7）